

日本の若者のどこがへんなのか^{1),2),3)}

——中学生・高校生の国際比較から——

松 井 洋

Some Problems of Japanese Youths —A Cross-cultural Study among the Youths in Six Countries—

Hiroshi MATSUI

要 約

国際比較調査の結果から、日本の若者の問題点について他の国と比較検討を行った。調査対象は、日本、アメリカ、中国、韓国、トルコ、キプロスの中学生と高校生5634名である。質問調査の内容は対人関係、親子関係、非行許容性、愛他性、道德意識、価値観、学校関連についての136項目である。分析方法は、各質問項目の回答の選択肢のうち、最も望ましくない選択肢を選んだ割合を6ヶ国の間で比較した。

結果は、日本の若者は人間関係に顕著な問題を抱えているということが明らかになった。日本の若者は愛他性、共感性、社会的スキルなどの人間関係についての個人的要因に問題があり、そのために人間関係に問題や悩みを抱えることとなるようだ。このような傾向は中学生男子で最も強い。

その他にも、日本の若者は性などの非行的行為に許容的であり、物質志向、外的統制などの価値観に問題があり、さらに、自制心や情緒性、意欲等も問題があり、そのようなことが悩みや人間関係の問題の原因にもなっていると考えられる。

さらに、親子関係についても親—子間が心理的に遠いという問題があり、このことが人間関係の問題の原因ではないかと推定できる。

以上のような日本の若者の問題は、人間関係を中心としてかなり顕著なものであり、日本の若者は悪い意味でかなり「へん」だと言え、その問題を一言でいうと「社会性」の問題と言える。このような日本の若者の問題の原因は広く日本社会全体にあるともいえるが、若者の問題は特に親子関係の問題と関連すると考えられる。そのため、まず親子関係の改善などの対策をはじめることが必要と考える。

キーワード：中学生，高校生，日本の若者，国際比較，人間関係

問 題

現代の日本の若者について、多くの問題が指摘されている。例えば、非行に関して、昭和50年代に比べると低下しつつあった青少年の非行率が近年また増加し、特に凶悪な非行が増加したことや、いわゆる「遊び型非行」の割合も増加したという報告がある（例えば犯罪白書平成10年版）。また、いわゆる援助交際という売春の問題や性感染症の増加など、性モラルが崩壊しつつあることによって発生する問題も増加している。あるいは、小学校では学級崩壊のような集団生活が全くできないというような問題が指摘され、大学生については、全国の大学長の8割が大学生の学力が以前より低下したと答えているように（日本経済新聞社1999. 8. 28）、学校に係わる問題も顕在化している。

このように、現代の日本の若者にはたしかにいろいろな問題があるようであり、困った人々、「へん」な人々と言われてもしかたのないところがあるだろう、しかし、このように顕在化した問題に注目して日本の若者が「へん」だと言ってしまうことには問題がある。つまり、若者の生きかたや考え方についての歪みという、背後に隠れた問題が存在し、そのことが顕在化している多くの問題の原因になっているとも考えられるからである。

このような問題に関して、われわれは中学生・高校生を対象に、道徳意識、非行許容性、愛他性を中心に国際比較研究を何回か行ってきた。さらに、日本の若者については約10年間の追跡調査を行ってきた。これらの研究の全体的な展望は中里・松井（1997）と中里・松井（1999）にまとめてある。ここでは日本の若者の「考え方」や「生き方」に歪みがあり、また、人間関係に問題があり、親子関係にも問題があることを指摘した。さらに、各々の問題のうち愛他性については、わが国の青少年の愛他性が他の国より低いこと、（中里他，1992，Nakasato & Matsui，1993），愛他行動を行うことの原因がわが国では情緒的な理由が優勢であり、大学生になってもそれは変わらないこと（松井1991），愛他行動をするかどうかの判断構造や愛他性の強さは国による違いがあること（松井他，1996，Nakasato，& Matsui，1996，松井他，1998，）そして、知人と他人とを問わずに愛他行動をする国と、そうではない国があること（松井1998）等を各々報告してきた。価値観についても、日本の若者の価値観が物質志向、現在志向、自己中心的という傾向をもつことを指摘してきた（松井1999）。

以上のように、これまでの研究において、日本の若者の問題点を指摘してきた。しかし、これまでの論文では、愛他性や価値観など若者の問題の各論が中心になる嫌いがあった。そこで、本稿ではこれまでの調査内容の全項目を見直すことにより、日本の若者のどこが「へん」なのかということについてのパースペクティブを得たいと思う。日本の若者のどこが「へん」な

のかということを考えるための基準としては、これまでのように、他の国の若者と比較してみることが妥当であると考え。そのため、主に96～97年に行った国際比較調査に基づいて、日本の青年の、考え方、人間関係、親子関係などの問題点について、他の国と比較したときに突出している点から洗いなおしてやることとする。加えて、日本の若者を、中学生と高校生、男子と女子の各層別に検討しなおして、若者各層の特徴と固有の問題についても見直してみる。なお、そのため、本稿の議論が一部分過去に報告したものと重複するところがあるということをはじめにおことわりする。

方 法

1. 調査対象者

調査対象者は Table 1. のように、日本、アメリカ、中国、韓国、トルコ、キプロスの6か国の中学生、高校生5634名である。これまでの分析ではこれにポーランドを加えた7カ国であったが、後述のように、本稿では中学・高校生×男女別の分析を行っている。ところが、ポーランドの結果は中学生の対象者が高校生に比べて少ないという歪みがあった。そこでこのような層別の分析を行う本稿ではポーランドの対象者を除外し、6カ国の比較を行った。

Table 1. 調査対象者

国	日本	中国	韓国	アメリカ	トルコ	キプロス	合計
人数	1232	816	739	1671	676	500	5634

2. 調査時期

日本、米国、中国、韓国は1993年、トルコは1994年、キプロスは1997年に調査を実施した。

3. 調査方法

質問紙調査を各学校の教室において、各国の調査協力者が実施した。

4. 調査内容

本調査全体では、非行許容性、道德意識、価値観、愛他性、共感性、親子関係、友人関係、学校関係、社会関係など117項目について質問し、多肢選択の選択肢を含めると149項目になる。しかし、愛他行動の理由のように、どの理由がよいか簡単には判断できないものも含まれるので、これらを除いた136項目選択肢について分析した。分析は、中学・高校生別×男女別

に行い、各質問項目の選択肢のうちもっとも問題と言える傾向が強い選択肢、例えば、「タバコを吸う」という質問に対する選択肢のうち最も許容的な「たいしたことはない」という回答のみに着目した。また、ここでは日本の若者の問題について分析しようとしているので、その最も問題のある選択肢の割合が6カ国のうち日本の若者が一番多いものあるいは反対に少ないものについてのみ列挙した。

このような分析を行った理由の一つは、これまでは各項目について様々な分析をしてきたが、そこでは例えば道德意識の高いものがどのくらいいるかという、ポジティブな傾向の多寡で問題をとらえる傾向があった。しかし、そのような見方では「問題」について見逃す恐れがないとは言えない。そのため、本稿ではこれまでの傾向とは逆に「最も望ましくない回答」にだけ焦点をあててみることにしたわけである。もう一つの理由は、本項では日本の若者の問題についてのパースペクティブを得たいがために、細かな差異に着目しないで、全体の傾向を見たいと考えたので、個々の項目の細かな回答の分布にこだわらず、最も悪い回答のみに着目しようと考えたからである。そのため、これまで報告したものと細部については違う点が生じた。このような差異については、そちらの結果を参照してほしい。

結果と考察

1. 全体の傾向

前述のように本項では136項目の最も悪い傾向だと判断した選択肢について、日本の若者が6カ国中一番多いか少ないかという場合だけを分析してみた。もちろん、項目によってはある選択肢のうちどの選択肢が問題がある、悪いとするかは微妙な場合もある。しかし、ほとんどの質問項目は「タバコを吸う」や「友だちとうまくやれない」など、中・高生の適応に関して良い－悪いがはっきりとしている内容である。そこでここではこれまでの経験から良い－悪いを決定した。もちろんなかには良い－悪いの判断が微妙な場合もあるが、その内容は各論で示すこととする。

その結果、中学・高校生、男女の層別の数を足し上げた全体の数で、問題のある回答の割合が6カ国中日本が最も多かった選択肢の数は、129項目、最も少なかった選択肢の数は36項目となった。良い傾向と悪い傾向が129対36ということは、かなりラフな見方ではあるが、日本の若者がかなり悪い意味で「へん」だということを示していると考えられる。

問題ある回答が多かったものと少なかった項目の数は、中学生男子で38対6、女子で30対10、高校生男子で37対8、女子で24対12である。このように見ると、日本の若者の各層とも

問題傾向のほうが望ましい傾向より強いということになる。また、中学生と高校生、男子と女子とを比較すると、高校生より中学生に、女子より男子に、より問題傾向が著しいと言うことができよう。

2. 「考え方」における問題

次に、非行許容性（8項目）、道徳意識（10項目）、価値観（10項目）など、善悪の判断、つまり「考え方」についての歪みについて検討する。Table 2.にこれらに関する合計28項目についての分析の結果を示した。Table のなかで+の印は問題傾向が日本の若者が6カ国中一番あることを、-の印は一番ないことを示す。Table 2.を見ると、+の印が-の印より圧倒的に多く、「考え方」についてわが国の若者は問題ある方向にかなり「へん」だと言えるだろう。

日常的な善悪判断についての項目である道徳意識については、日本の若者には目立った問題はなく、むしろ高校生女子のように望ましい傾向もみられる。他方、日本の若者の問題は、性などの犯罪ではないが中学・高校生にはあまり望ましくない行為に関する非行許容性である。

Table 2. 非行、道徳意識、価値観などの「考え方」における問題傾向（+は問題のある選択肢が6カ国中で一番多いことを、-は少ないことを示す）。

質 問 項 目	選 択 肢	対 象 者			
		中学生		高校生	
		男子	女子	男子	女子
非行許容性					
酒を飲む	たいしたことはない			+	+
エロ本やポルノ映画を見る	たいしたことはない		+	+	+
学校をさぼる	たいしたことはない		+	+	
異性の友達と二人で泊まる	たいしたことはない		+	+	+
道徳意識					
困っている人を助けない	あまり悪いことと思わない				-
公園の花をおる					-
友達との約束を破る					-
物質志向					
お金がなにより大切だ	まったくそう思う	+		+	
お金だけでは幸福になれない	そう思わない		-		-
外的統制					
人生は運に左右されることが多い	まったくそう思う	+		+	+
成功はその人の努力しただけ	そう思わない				+
現在志向					
今よりも将来のためがんばる	そう思わない	+	+	+	+

非行許容性は盗みなどの犯罪行為と、性や酒などの犯罪ではないがぐ犯と関係の深い行為の両方に関する項目からなる要因である。結果は、盗み、薬物使用などの犯罪行為については、日本の若者は良い方向でも悪い方向でも6カ国中一番強い傾向がないので、Table 2.には+、-どちらも項目がのせられていない。つまり、日本の若者はこの点については顕著な考え方の歪みはないようだ。しかし、酒や性などのぐ犯行為に関しては日本の若者は問題傾向ばかりがある。

非行許容性とならんで、価値観のうち物質志向、外的統制、現在志向という望ましくない傾向もみられる。このような価値観については確かに良い-悪いの判断は微妙と言えるだろう。しかし、現在の少年の非行や犯罪に見られる、金やものを欲しがり強盗や窃盗を簡単にしてしまう傾向や、努力なしに安易に欲求満足をはかろうとする傾向、そして無気力、このような特徴は物質志向、外的統制、現在志向という価値観と一致する。そのような点から、これらの価値観は「悪い」と判断すべきである。そして、日本の若者の問題も深刻と言えるだろう。

以上のことから日本の若者の「考え方」についてまとめると、道德意識、盗み、薬物使用等の重い非行についての許容性に顕著な歪みが見られないことから、日本の若者は良い悪いの判断力は持っていると言えるだろう。問題は性に対する非行許容性や価値観に見られるように、目先の欲求に弱く、そのような行為に抑えがきかないということである。

「考え方」の問題は、中学・高校生×男女別の各層で傾向が違う。中学生と高校生とを比べると、道德意識に関する項目を除いて、高校生のほうにより多くの問題がある。男女別に見ると、男女で全く違う傾向を示したのが、物質志向の価値観で、男子は中学・高校生とも物質志向が強いが、女子はむしろ物質志向ではなく精神志向の傾向がある。

男女の違いは中学生で顕著である。一言でいえば、性などの虞犯行為に弱い女子と、物質志向、外的統制、現在志向という価値観に歪みの強い男子ということになる。

3. 情緒的な問題傾向

情緒(3項目)、意欲(1項目)、自制心(5項目)、悩み(16項目)など、概して情緒的と言える問題に含まれる項目についてTable 3.にまとめた。ここでは自分を制御するという意味から生活習慣の項目から関連するもの(5項目)も一緒にして合計29項目について分析した。

全体的に見ると、日本の若者は自制心や生活習慣に関する項目に多くの問題傾向が見られる、つまり自分をコントロールするということに弱点があると言えるだろう。これに意欲が弱いということを加えてみると、日本の若者の問題は「意志力の弱さ」と言い表すことのできる問題とも言えよう。

日本の若者のどこがへんなのか

Table 3. 意欲や自己制御など情緒的な問題傾向（+は最も問題のある選択肢が6か国中で一番多いことを，-は少ないことを示す）。

質問項目	選択肢	対象者			
		中学生		高校生	
		男子	女子	男子	女子
自制心					
衝動買いをするほうだ	まったくそのとおりだ			+	
がまんづよいほうだ	まったくそうではない	+			
きまりを守るほうだ	まったくそうではない	+	+		
情緒性					
気分の変化が大きいほうだ	まったくそのとおりだ			+	+
意欲					
何かをしたいという意欲も元気もない	まったくそのとおりだ	+		+	
悩み（14項目からの多肢選択）					
卒業後の進路		+	+		
自分の能力				+	
受験		+	+		
友人との不和		-			
いじめやおどし			-		
体が弱いこと		-	-	-	-
容姿や体型			-		
自分の性格		+			+
異性問題					+
家庭の経済的事情				-	
生活習慣					
毎朝きちんと洗顔したり歯を磨く	やっていない	+		+	
夜更かしをしないようにする	やっていない	+	+	+	+
朝御飯をきちんと食べる	やっていない				-
時間をきちんと守る	やっていない	+	+	+	

これらの情緒的な問題では、中学生と高校生の間には違いがあり、中学生の方が進路や受験など自分の将来や学校にかかわることに悩みが強く、また、自制心にも問題が強いようである。また、中学・高校生とも男子のみに問題傾向が見られることとして、意欲のなさがある。

4. 人間関係における問題傾向

Table 4.に人間関係に関する問題傾向を示した。ここでは、広く人間関係に関するものを集めたので、愛他性（8項目）や共感性（5項目）や生活習慣に関する（3項目）項目も対人行動（5項目）、友人関係（2項目）の項目も一緒に示した。合計23項である。

Table 4. 人間関係における問題傾向（+は最も問題のある選択肢が6か国中で一番多いことを，-は少ないことを示す）。

質 問 項 目	選 択 肢	対 象 者			
		中学生		高校生	
		男子	女子	男子	女子
愛他行動					
知人援助（席を譲る）	譲らない			+	
寄付	お金はあげない		+	+	+
奉仕	（ボランティアを）断る	+	+	+	+
共感性					
人の気持ちがわかるほうだ	まったくそうではない	+	+	+	+
悲しんでいる人を見ると自分も悲しくなる	まったくそうではない	+	+		
友達が喜んでいるのを見ると自分までうれしくなる	まったくそうではない	+	+	+	
悲しい映画を見てももらいなさしそうになる	まったくそうではない		+		
対人行動					
人にきつくあたることがある	まったくそのとおりだ	+	+	+	+
人の立場をよく考えて行動するほうだ	まったくそうではない	+	+	+	+
人前に出ることがとても苦手だ	まったくそのとおりだ	+	+	+	+
皆から孤立している	まったくそのとおりだ	+		+	
友達とどうしてもうまくやっっていけない	まったくそのとおりだ	+			
友人関係					
友人関係に満足していますか	不満だ	+			
生活習慣					
人との約束を守る	やっていない	+			
目上の人にていねいな言葉を使う	やっていない	+	+	+	+

Table 4.をみてすぐに分かることは、全てが+の印であり、-の印は全く無いということである。愛他行動で「奉仕」について、共感性では「人の気持ちがわかる」で日本の若者の全ての層に問題傾向があるように、日本の若者は他者の気持ちを考えたり感じたり他者のために行動する傾向が弱いようである。また、対人行動の多くの項目や生活習慣の「目上の人にあいさつ」のように、社会的スキルについても問題傾向が強い。以上のように、日本の若者は人間関係に関して、他の国と比べてかなり決定的に「へん」だと言えるであろう。

また、全体的に言えることは、友人関係についての満足感のような対人関係が現在良くないという「現象」よりも、愛他性や共感性や社会的スキルというような、対人関係における「資質」に欠けるということである。つまり、人の気持ちを察したり、人のことを考えたりする傾向に欠け、加えて、人とうまくやる技も拙いということである。

以上の傾向は、中学・高校生、男女共に共通しているが、共感性に関する項目などからみて

Table 5. 学校に関連する問題傾向（+は最も問題のある選択肢が6か国中で一番多いことを，-は少ないことを示す）。

質問項目	選択肢	対象者			
		中学生		高校生	
		男子	女子	男子	女子
学校非行環境					
盗み等をする人	たくさんいる				-
いじめをする人	たくさんいる			-	-
尊敬できる人	いない	+			
自分に忠告してくれる人	いない	+			
学校に不満の理由 (9項目から多肢選択)					
友達とうまくいっていない					+
嫌いな先生がいる			+		
学校のきまりが厳しい			-	-	-
教師					
信頼できる先生がいますか	いない			+	
放課後や休日の過ごし方 (13項目から多肢選択)					
勉強をする			-		
本や雑誌を読む			+	+	
テレビやラジオ			-		-
家の手伝い		-	-		-
友人と遊ぶ		+			
街をぶらつく		+		-	
教会や寺に行く		-		-	

中学生のほうに問題傾向が強い傾向があると言えよう。

このような問題ある傾向の結果として生じると考えられる，人間関係の上の悩みについては女子より男子のほうが強い。そして，特に中学生男子に人間関係上の問題があるようである。「友達とうまくやれない」ことや「友人関係に不満」ということなど，中学生男子のみにみられる問題傾向がある。

5. 学校に関連する問題傾向

前項と関係が深い，学校に関する問題，学校非行環境（11項目），学校不満（1項目），不満の理由（9項目），教師信頼（1項目）に放課後・休日の過ごし方（13項目）を加えた全35項目についての分析結果をTable 5.にまとめた。

Table 5.では+と-が概ね半々であり，「考え方」や「人間関係」と比べると日本の学校の問

Table 6. 親子関係に関する問題傾向（+は最も問題のある選択肢が6か国中で一番多いことを，-は少ないことを示す）。

質 問 項 目	選 択 肢	対 象 者			
		中学生		高校生	
		男子	女子	男子	女子
父子関係					
父はなにかと私に相談する	そうではない	+	+	+	+
父は私のいうことなら何でも聞いてくれる	そうである	-	-	-	-
父とはうまくいっている	そうではない	+	+	+	+
父を尊敬している	そうではない	+	+	+	+
父は私に期待している	そうではない	+	+	+	+
父のようになりたい	そうではない	+	+	+	
母子関係					
母は私のすることになにかと口出しをする	そうである			+	
母はなにかと私に相談する	そうではない	+	+	+	+
母は私のいうことなら何でも聞いてくれる	そうである	-	-	-	
母とはうまくいっている	そうではない	+	+	+	+
母を尊敬している	そうではない	+	+	+	
母は私に期待している	そうではない	+		+	
母のようになりたい	そうではない	+	+	+	

題は顕著ではない。学校の決まりが厳しいということについてはむしろ-である。また、いじめの問題も高校生では-である。つまり、日本の若者の学校不適應の原因は学校の問題というより、前項で見たような本人の対人関係の資質に負うところが多いと考えられる。

本項の趣旨とは少し離れるが、Table 5.には放課後の過ごし方についても示してある。ここでは日本の若者は家の手伝いをしないこと、実はそれほど勉強しているわけではないこと、宗教との関係が薄いことなどがわかる。

6. 親子関係における問題傾向

Table 6.に親子関係についての20項目の分析結果を示した。親子関係に関する父母それぞれ10項目ずつの項目の多くに問題傾向があることがわかる。ここで言えることは、これまでの論文でも繰り返し述べてきたこと、つまり、日本の親子関係は悪いということが、違う分析方法でも示されたということである。日本の若者は、父とも母ともに、「うまくいっていない」、「尊敬しない」、「父母のようになりたいくない」、「期待されていない」という傾向が顕著である。他方、「子どものいうことを何でも聞く」ということが6か国中最も少ないことは、いわば甘やかし傾向とも言えることが少ないということである。しかし、このことは「口出し」につい

て日本の若者の親はあまりしないということとも合わせて考えると、結局、日本の親子関係はお互いの間が密接ではなく希薄で、言わば心理的な距離が遠いということになるのではないだろうか。そして、このような親子関係が日本の若者の考え方や人間関係の問題と深い関係にあるという研究結果から考えると（松井 1991, 松井他 1998, 中里・松井 1997, 1999）、親子関係の問題は極めて深刻な問題だと言えるだろう。

そして、このような問題傾向は母親より父親、女子より男子で顕著であり、女子高校生の母子関係は他の層や関係に比べるとかなり良いようである。

討 論

前述のように本項では 136 項目について、好ましくないと考えられる選択肢が、日本の若者が 6 カ国中一番多いか少ないかという極端な場合だけを分析してみた。その結果中学・高校生、男女層別の数を足し上げた数で、問題のある回答の割合が 6 カ国中日本が最も多かった選択肢の数は、総計で 129 項目、最も少なかった選択肢の数は 36 項目となった。悪い傾向が良い傾向の 3.5 倍に達するということから、日本の若者が他の 5 カ国の若者と比べて、かなり悪い意味で「へん」だと言えるだろう。

問題ある回答が多かったものと少なかった物の数は、中学生男子で 38 対 6, 女子で 30 対 10, 高校生男子で 37 対 8, 女子で 24 対 12 である。このように見ると、日本の若者のうち、高校生より中学生に、女子より男子に、より問題傾向が著しいということができよう。

この「へん」だという傾向が最も顕著だったのが人間関係に関する項目群であった。Table 4.のように、愛他性、共感性、対人行動などの人間関係に関する項目について、日本の若者は良い傾向で 6 カ国中突出したものが皆無であり、全て悪いと考えられる項目ばかりであった。特に、中学・高校生、男女全てがもっとも悪いと考えられることは、「ボランティアを断る」、「人の気持ちがわからない」、「人にきつくあたる」、「人の立場をよく考えて行動しない」、「人前が出るのが苦手」ということであった。このような結果から考えると、人間関係に関して日本の若者は、個人主義で自分中心に生きていくという、幾分は積極的と言える生き方ではなく、人間関係が弱いという消極的な問題だと言えるだろう。つまり、「人の気持ちがわからない」、「人の立場を考えない」ので「人前が苦手」で、「人にきつくあたる」ということもしてしまい、「ボランティアを断る」ということにつながってしまうのではないだろうか。このことから考えられることは、日本の若者は人間関係に不慣れ（多分小さいときから）ということ、この原因には、親子関係の問題、同胞数の減少、友人関係の希薄化ということが考えられるだろ

う。

もう一つ、調査項目から問題傾向が顕著に現れたのが親子関係についてである。日本の若者は、父とも母ともに、「うまくいっていない」、「尊敬しない」、「父母のようになりたくない」、「期待されていない」という傾向が顕著である。考え方によっては望ましいという傾向も無いではなく、それは「子どものいうことを何でも聞く」ということが6カ国中最も少なく、いわば甘やかし傾向とも言えることが少ないということである。このことは「口出し」について日本の若者の親はあまりしないということとも合わせて考えると、結局、日本の親子関係は希薄で心理的な距離が遠いということになるのではないだろうか。この結果は親子関係についてトータルな心理的距離を産出して分析した松井（1998）の結果とも一致する。

このような問題傾向は母親より父親、女子より男子で顕著であり、女子高校生の母子関係は他の層や関係に比べるとかなり良いようである。

非行、道徳意識、価値観などの「考え方」についても、日本の若者は問題傾向が強く、特に、性に関するような、犯罪ではないが望ましくない行為について許容的である。また、物質志向、外的統制、現在志向という望ましいとは言いがたい価値観も強い。結局、日本の若者の「考え方」はその場、その場の欲求満足ということであり、将来展望や、我慢や、他者や社会のことが視野にはいっていないようである。

「考え方」の問題は層別に見て違いがかなりあり、高校生は非行許容性も価値観も問題が顕著であるが、中学生の場合は男子は価値観に、女子は非行許容性に特に問題がある。

自制心、情緒性、意欲、悩み、生活習慣など、広い意味での情緒的な問題についても、日本の若者は望ましくない傾向が強く、特に自制心や気分の安定、意欲に問題が有るようである。自制心に欠けるということは前項の非行許容性や価値観の歪みとも関連が深いと思われる。結局、その場の欲求で行動し、がまんはしないということになる。

この項目でも層別に違いがあって、問題は女子より男子、高校生より中学生に強いようであり、男子は自制心の問題と意欲に欠けるという問題が強く、中学生は進路や受験の悩みが強いという傾向がある。

最後に学校に係わる項目については日本の若者の問題はあまりないようである。例えば、日本の学校は「きまりが厳しい」とか「いじめがある」とか「勉強がたいへん」とよくいわれるが、若者自身の見方ではそれはむしろ他の国より弱いようである。そのため、学校に対する不満もあまり強くないようである。ということは、学校不適応の原因はむしろ人間関係が弱い若者自身の問題と考えたほうが良いのではないだろうか。

ここでも中学生より高校生、男子より女子の学校適応がよいようである。中学生男子は学校

の人間関係に問題がみられる。

以上の点を各層別にまとめてみると、最も問題傾向が強いと言えるのは中学生の男子である。このことは問題のある項目総数からも支持される。男子中学生の特徴は、まず友人関係が最もうまくいっていないということである。「友達とどうしてもうまくやれない」、「友人関係に不満」という傾向がある。もう一つの特徴は、価値観や自制心の問題で、その場の欲求に弱く我慢ができないという傾向は男子中学生で最も顕著である。

中学生女子は人間関係が苦手という他の層と共通した問題もあるが、特徴的なことは非行許容性の強さである。性などの非行的行為に対して抑制しない。つまり、自分が今したいことをするという態度が顕著である。

高校生男子は愛他性、非行許容性、人間関係など共通する問題がそれぞれ顕著であり、気分、意欲、自制といった情緒的な問題も強い。

高校生女子は他の3層に比べると最も適応的と思われる。特に、母親との関係は他の層より良い。しかし、非行許容性や価値観から見て、その時々にしたいたいことをするという、自分本位の傾向が見られる。

以上のように、日本の若者は中学・高校生や男女など、層により違った問題もあるが、共通して人間関係や考え方や親子関係に重大な問題をかかえており、かなり「へん」だといえる。この「へん」な傾向を一言で「どこがへんなのか」と言い表すことは難しいが、あえていえば「社会性」といえる。つまり、人間関係が弱いのも、価値観や生き方がその場の自分の欲求しだいというのも、つまりは、自分が社会の一員でありその社会のなかで生きその社会のために生きるということが欠けているということと考えられる。その意味で、親子関係の問題もまた家族という社会ということで共通している。つまり、日本の若者の「へん」なところは、自分が友人、家族、その他の見知らぬ人々とも一所につくる社会の一員であり、そのためにしなければならないことがあり、身につけなければならないことがあるということがぬけおちているということである。

以上のような問題の原因としてこれまでのわれわれの研究成果から親子関係が考えられ（松井他 1998, 中里・松井 1999）、親子の関係の修復や親によるしつけの回復が必要となろう。さらに、このような親子関係の問題を生じさせた、戦後の日本人の「生き方」が基本的に問われるべきと考える。つまり、日本人における物と心、私と公の考え方といったことが問われると思うが、この問題については別稿にゆずりたい。

引用文献

- 松井 洋, 1991, 『青年期における愛他行動の発達とその規定因』, 川村学園女子大学研究紀要 第2巻 181-193.
- 松井 洋・中里至正・加藤義明・瀬尾直久・石井隆之, 1995, 『愛他性の構造に関する国際比較研究』, 日本心理学会第59回大会発表論文集, 173.
- 松井 洋, 1997, 愛他性に関する国際比較研究—米国, 中国, 韓国, トルコ, 日本の中学生・高校生を対象として—, 川村学園女子大学研究紀要 第8巻 第1号, 147-165.
- 松井 洋・中里至正・石井隆之, 1998, 愛他性の構造に関する国際比較研究, 社会心理学研究, 第13巻, 2号, 133-142.
- 松井 洋, 1998, 中学・高校生の思いやり意識—日本・中国・韓国・アメリカ・トルコの愛他性の国際比較研究—, *Health Sciences*, vol.14, no. 2, 45-55, 日本健康科学学会.
- 松井 洋, 1998, 愛他性に関する国際比較研究Ⅱ—日本, 中国, 韓国, アメリカ, トルコ, キプロス, ポーランドの中学生・高校生を対象として—, 川村学園女子大学研究紀要 第9巻 第1号, 175-186.
- 松井 洋・中里至正・瀬尾直久・石井隆之, 1998, 親子間の心理的距離と愛他性に関する国際比較研究, 日本教育心理学会第40回総会発表論文集, 197.
- 松井 洋, 1999, 日本の中学生・高校生の価値観に関する研究—日本, アメリカ, 中国, 韓国, トルコ, キプロス, ポーランドとの国際比較研究—, 川村学園女子大学研究紀要 第10巻, 第1号, 131-153.
- Nakasato, Y. & Matsui, H., 1993 Altruistic Attitudes of Japanese Youths. *International Journal of Psychology*, vol. 27, pp. 562.
- Nakasato, Y. & Matsui, H., 1996 A Structure of Altruistic Attitudes —A Comparison of American, Chinese, Korean, Turkish and Japanese Youths—. *International Journal of Psychology*, vol. 28, pp. 48.
- 中里至正・加藤義明・杉山憲司・松井 洋・瀬尾直久, 1992, 『非行抑止要因の文化差に関する研究—日本・韓国・米国・中国の高校生を対象として』, (財)日工組調査研究財団委託研究報告書.
- 中里至正・松井 洋 (編著), 1997, 『異質な日本の若者たち』, プレーン出版.
- 中里至正・松井 洋, 1999, 『日本の若者の弱点』, 毎日新聞社.

注

- 1) 本論文は、筆者の他、中里至正、瀬尾直久（東洋大学）、石井隆之（日本・精神技術研究所）によって十数年来行われてきた研究プロジェクトの成果の一部について分析したものである。
- 2) この研究プロジェクトは、川村学園、私学振興財団、東洋大学井上円了研究助成金の研究補助を受けている。関係各位に感謝します。
- 3) キプロスの調査はDr. Lefki Anastaiou 韓国はDr. Key Ray Chong と李元錫先生、中国は邵道生先生と畢曉白先生、トルコは近藤幸子先生の協力によって行われた。また、ニューヨーク州立大学バッファロー校のRoger V. Burton 教授には調査実施全般に協力をいただいた。あわせて感謝いたします。